

むくのきだより 2月号



令和5年1月31日 港区立赤羽幼稚園 園長 中村 美奈子

子供たちに豊かな体験を～直接触れる大切さ～

園長 中村 美奈子

10年に1度の寒波という天気予報の朝、水道管凍結防止のために出していた校庭の水飲み場には、柱状の氷ができていました。ピロティでは、遊びで使って置き忘れた雪平鍋(ゆきひらなべ)の中の水が凍っていました。年長ゆり組の子供が鍋の中の落ち葉をつまみ上げると、丸い氷がくっついてきました。「みんなにお知らせしなくちゃ!」と、氷発見のニュースは、瞬く間に他の子供たちに伝わります。そして、氷捜索隊となった子供たちが、「あそこにあるかも」と、日常の遊びの中で気付いた「寒い場所」「水たまりがある場所」に走って行きました。

実は、氷ができた雪平鍋は、片付け忘れた物ではありません。片付けもしっかりできる赤羽幼稚園の子供たちですから、前日の降園後に教師たちが水を入れて置いておいたものです。その他にもいろいろな場所に水をまいておきました。仕掛けが成功してうまく氷ができたところもあれば、教師の予想が外れて凍らなかったところもありました。しかし、どちらも氷捜索隊の子供たちの「自然の力の発見」につながり、発見した感動を伝え合ったり、共感し合ったりする姿が見られました。

幼稚園教育要領には、「幼児期において自然のもつ意味は大きく、自然の大きさ、美しさ、不思議さなどに直接触れる体験を通して、幼児の心が安らぎ、豊かな感情、好奇心、思考力、表現力の基礎が培われることを踏まえ、幼児が自然とのかかわりを深めることができるように工夫すること。」とあります。この「直接触れる体験」を本園では大切に、季節を体感できるように遊びの場を工夫したり、行事を計画したりしています。

年少さくら組の子供たちは、朝の支度を終わると教師と一緒にみんなで育てているキャベツを見に行きました。「あれ、これ何だろう?」という教師の言葉で、葉っぱの上にたまった水が凍っていることに気付いた子供たち。「あっ、氷だ!」「ここにもある!」と次々と見つけて、寒い朝にも関わらず、小さな手に小さな氷を嬉しそうに乗せていました。そして、他にも見つけようと、今度は自分で探しに行きました。このような、日々の体験の積み重ねで、好奇心が芽生え、子供の世界が広がっていくのだと思います。

この「直接触れる大切さ」は、生き物の飼育でも感じています。本園のアイドル、モルモットの「もるくん」を、毎日、当番の子供たちがお世話をしています。えさやりの楽しい仕事だけでなく、フンや食べ残しの掃除もグループで協力して行っています。もりもりとえさをおいしそうに食べるもるくんを眺めている子供たちは、嬉しそうです。小さな命を慈しむ心が育っています。長期休業中など、教員が交代で自宅に持ち帰って世話をするのは大変ですが、命の温かさを感じている子供たちの姿を嬉しく思っています。

ご家庭でも、自然や命に触れる「仕掛け」をこっそりつくってみてはいかがでしょうか?

